



いつも

---

「いつも一緒にいてね」

と、その人は言った。けれど、僕はいつも一緒にいたいとは思わない。だって、一人の時間も大切じゃないか。それに、その人は、超うざいのだ。

「こんなこと言いたくないけどさー、」

この枕詞から始まり、その人の話は延々と続いて行く。そう。完成前のそうめんのように。

「本当は、言いたくて、しょうがないんだよね？そうでしょう」ということばを、僕は必死で飲み込む。

「そろそろ、行かなきゃ。アイスが溶けるし……」僕はそう言って、その人から離れようとする。

「アイス？私も食べたーい」そう言ってその人は、僕に憑いてくる。いつもいつも。

僕は本当は一人で食べたかったアイスを、二つに分ける。

「どうぞ」

「ありがとー」

その人は、おいしそうにそれを食べる。ふりをする。

と、いうのも、食べる隙間もなく、ずーっとしゃべっているからだ。結局、アイスはでろでろに溶けてしまう。

あーあ、楽しみにしていたアイスだったのに。

そろそろ、歯を磨かなきゃ。

そう僕が言うと、

「あ、っそう。もうそんな時間？私も磨こうっと」

そうって、その人は、洗面所までついてくる。

「うーしみる」と僕が知覚過敏の痛みを訴えても、そんなのお構いなしに、その人は僕の隣でしゃべっている。僕は鏡を見ながら、歯を磨き続ける。音ではなく、目の前に広がる鏡面に集中する。そこでは、あたかも僕は一人でいて、一人で歯を磨いているように見える。

隣では、歯も磨かずに、腕組みをして、その人が話し続けている。よくもまあ、飽きないものだ。

僕はうんざりして、うがいを思いっきり声を出しながらする。

そんなことなど気にもしないで、その人はしゃべりつづける。

僕はもう話の中味など気にしていない。もう何度も同じ話をしている。自分が死んだ日のこと。

「こんなこと言いたくないけどさー、私ってホントどじなのよ。自分から落とし穴に落ちちゃってさー、ま、ほんとのところ、恥ずかしくて、穴でもあったら入りたいてって思ってたからちょう

どよかったんだけど、でもその穴から一生抜け出せないままだとは思わなかったわよねー。それなら、恥ずかしい思いしてみんなのさらし者になってた方が、まだましだったよ」

彼女の良いところは、人の悪口を決して言わないことだ。いつも自分ばかり責めている。それが多少うざくもあるのだが。

「じゃ、もう寝るよ」

「ほんと！じゃあ、私も寝る！」

僕の背後霊が、スーッと布団にもぐり込んでくる。ぞわぞわっと寒気がして、一瞬僕は身震いする。

「ま、夏だから涼しくていいか」

僕は静かに眠りにつく

おわり

【2017-08-16】指さし小説 第17話

<http://p.booklog.jp/book/116553>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

今回のテーマは、「いつも」でした。

私の好きな歌で、いつも一緒にいてねという内容の歌詞があるのですが、冷静に考えると、ずっと一緒ってつら

いよなあと思ってきたので、それをヒントに作りました。

夏は良いけど、この人冬はどうするんだろう。と思いますね。

電気毛布とか使うのかな～

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116553>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト